

町内会デビュー

昼下がりの通りを、パトカーがけたたましくサイレンを鳴らして走った。十分ほどして、町の広報車が来た。

「先ほど、田中町三丁目の川沿いでクマが目撃されました。外出は控えてください。」
幸いにも人に被害はなかったが、クマの出現で町中が大騒ぎになった。

あれから一年後、またクマの出現が予想される季節になり、町内会が公民館で開かれた。クマとの遭遇への不安を何とかしたいのだが、相手がクマでは決定的な方法があるわけではない。

「昔はこんなことはなかった。生活が変わったからかな。この間、テレビで、人間の住むところが山と直接つながったのがクマやイノシシや鹿やらが出る原因だと言っていた。」

長老の発言で、会場は妙にしんみりとなった。一呼吸の後、町内会長が立ち上がった。

「提案ですが、人間と動物との中間地帯があるといいということですので、共同作業で町と山との境の草刈りと掃除をしてみませんか。町内全域というのはとても無理ですが、せめて昨年クマの出た川沿いのあたりだけでも。私たちにできることは私たちでしませんか。」

町内会長の提案は採択され、緊急の回覧板が回された。今度の日曜日に一斉の共同作業である。各家庭から一人が作業に参加するのが町内会の決まりだ。

「明、今度の日曜日の共同作業、中川家代表でお願いね。」

母の言葉に、明の夕食の箸が止まった。

「ええっ、どうして僕なの。共同作業の時は、お父さんが帰ってくるじゃない。」

「そうだけど、今度のはクマ対策ということで、臨時の特別作業なの。年間予定で分かっているなら、お父さんに赴任先から帰ってもらえるけど、今回はもう仕事が入っていて無理だって。」

「だったら、お母さんが出れば。」

「それがねえ、パートが休めないの。何とかならないかと思ったのだけど、もうシフトが確定していて、皆さんに迷惑を掛けるわけにいかないし。」

「僕はまだ、中学生だよ。」

「もう中学生だから、大丈夫。申し訳ないけど、部活は休ませてもらってよ。ただの作業じゃなくて、クマ対策だから中学校のお役にも立つというものよ。感謝されてもいいくらいよ。」

「よくそんな理屈が出てくるよ……。知らない人の中での、いやだよ。」

いくらクマのこととはいええ、大人に混じっての作業など、どのような雰囲気か想像できない。浮いてしまつて居場所がなくて、おろおろしている自分の姿が目につかぶ。

「大丈夫よ。心配しないで。みなさん、面倒見てくださいから。明の町内会デビューね。」

家の事情を思えば仕方のないことも、理屈では分かる。だが素直にうなずけない。明は黙って台所を出た。

次の日、明は改めて母から共同作業への協力を頼まれた。

「明、日曜日の作業、お願いね。中川家代表だから、逃げられないわね。」

「逃げるって、どういうことだよ。」

明は、思わず大きな声になった。母は肩をすくめて言った。

「ごめん、ごめん。気にさわったかしら。励ましとお願いのつもりだからね。」

日曜日がきた。母は相変わらずの調子である。

「さあ、ぼちぼち集合の時間よ。お昼はカレーを作っておいたから、温めて食べてね。私もパートだから、そこまで一緒に行こうよ。最初の挨拶はしてあげるから。あつ、それは過保護か。」

「本気でひとごとだと思ってるだろ。」

明は、しぶしぶ腰を上げた。

集合場所の公民館前の駐車場に行くと、明はいきなり声を掛けられた。

「おつ、中川君の息子だな、ご苦労さん。頑張ろうな。」

明は面食らって、しどろもどろの返事をした。

「ええ、はあ、そうですが……。何で分かったんですか」

「同級生だよ。同級生の佐藤だよ。君は中川君とそっくりだから、すぐ分かったよ。いいなあ、君のような若い人が来てくれるのは。こっちにおいでよ。みんなに紹介するよ。」

あれよあれよという間に、明は中川家の代表だという紹介をされ、まわりを笑顔で囲まれた。

作業は、視界を妨げる立木の伐採、草刈りとゴミ拾いである。念のため、クマよけの音を鳴らしている。どうしようかと戸惑っていると、五軒先の吉田さんのおばあさんが目に入った。鎌の使い方が堂に入っている。つい見とれていると、

「明くん。」

と、声を掛けてきた。

「草刈りなんかしたことないだろう。ほら、こんなふうにしてごらん。草を握った手元の近いところに鎌を

当てて、手前に引くように……。欲張って一度にたくさん草を握ると手をけがするから、ほどほどに……。そうそう、なかなか手つきがいいよ。若い者は飲み込みが早いね。」

褒められると元気が出る。ザクツ、ザクツといい調子で刈る。刈り取った跡が空き地のようにはつきりするので、いかにも仕事をしている気分が高まる。思わずペースが上がる。するとまた吉田さんから声が掛かる。

「張り切りすぎるとバテるよ。一定の調子で、リズムよく出来るくらいの力加減でやると疲れないよ。」

秋も終わりに近い季節であるが、汗が噴き出る。軍手をした手の甲で、額の汗を拭く。続けていると腰も痛くなってくる。腰をトントンとたたきながらふと周りを見ると、何人かの人が、刈り取った草を運んでいる。凸凹でこぼこで足元が良くないところで足をとられそうになる人もいる。

「よし。」

明は、あちこちに散らばっている切ったばかりの草や枝を集めて運び始めた。生の枝や束ねた草は思ったよりも重い。抱えて運ぶのは重労働だ。

「やあ、よく気が付いたなあ。助かるわ。」

明は、確かにこの仕事はお年寄りの仕事ではないと思った。

十二時を過ぎて、町内会長が作業終了をふれて回った。

「本日の作業は終了です。集まってください。」

再び集合した参加者に、町内会長が拡声器のマイクを持って、お礼の挨拶をした。

「どなたも、お疲れ様でした。おかげで、作業が予定通りに終了しました。これでクマが絶対に出ないというわけではありませんが、いきなりクマとぶつかる危険はずいぶん減ったと思います。今回は急なことでし

だが熱心に参加していただき、嬉しく思います。初めての参加の方もおられました。これを機会にお近づきになれば、ありがたいです。クマとの出会いはありませんが、こういう出会いは歓迎です。」

「クマみたいな者はいるぞ。」

という声も飛んだが、拍手が起きた。参加者には、大人にはビールとおつまみが、明にはパンとスポーツドリンクが配られた。明が帰ろうとすると、佐藤さんとお年寄りたちが寄ってきた。

「明君、今日は来てくれて、ありがとう。若い人がいると作業が早いわ。」

「そうそう。こっちまで元気になれるよ。中川家代表、お疲れ様。」

明は、くすぐったかったけれど、なんだか大人になったような気持ち持たがした。

帰宅した明は、カレーを温めて大盛りにした。いつもの母の味だとは思いつつも、ちょっと甘いのではないかと感じてソースをたっぷりかけた。

翌朝、明がいつものように玄関を出ると、吉田さんが家の前を掃いていた。いつもは頭をペコッと下げるだけの明だったが、小走りに近寄って自分から声を掛けた。

「おはようございます。」

「あら、明くん、おはよう。昨日はお疲れ様。腰が痛くならなかったかしら。」

「はい。なんとも。吉田さんこそ大丈夫ですか。」



その日、通学の途中で、明はあちこちから声を掛けられた。朗らかな声でそれに応えながら、明は、背筋を伸ばして、大股で学校に向かった。